

## 衛生兵、訓練生活のひと駒

東京都 福原良忠

昭和十四（一九三九）年十二月十日、世田谷野砲第一連隊における一カ月間の軍隊教育が終わり、東京の戸山町にあった第一陸軍病院に衛生兵として復帰した。

昭和十五年一月十二日、私達同年兵百三十五人には、これから三月三十日まで衛生兵となるための教育が始まった。この教育は、軍隊の訓練・教育と違い、衛生教科書、エンピツ等を持って講堂に集まる。そして午前の教育は朝八時三十分から十一時まで、昼休み後は午後一時より四時三十分までである。

そして毎日は起床五時三十分、保健、体操、朝食につづいて班内整頓と目が廻るような忙しさである。そして夕食後は班内で班付上等兵の講堂で

の教育の繰り返し返し、その日の教育の復習で、ちょっとでも違うとビンタが来る。私達にとって長い二カ月間だった。

昭和十五年四月一日付で病院勤務先が決まった。私は第七内科精神病科（「七内科」）の勤務となる。同年兵は石場、久保田、綱島、石川、山本、谷塚、保坂で、先輩の兵としては三年兵と二年兵五人が迎えてくれた。

刑部軍医殿より「古い人と仲良く勤務する事」を言われた。先輩には中村伍長、山下・矢田上等兵、杉田・野口一等兵がいた。四月までは各隊に多くの入営者のある時期なので当「七内科」も入院患者の多いとのことであった。病室内に入った時は何とも言えない空気がこもっている。窓には鉄格子が張られ、廊下の入口は二重ドア、病室は八人室が二室、三人室が一室、それに浴室、洗面所がある。個室内は鉄板張りですドアに小さい窓がある狂暴患者入れる個室が四室ある。

患者で一番多いのは、テンカン持ち、小心者、大風呂敷、神経衰弱、ロドン等と聞かされた。一番先にやらされたことは便所掃除、洗面所、風呂場及び各部室、廊下などの掃除で、その時の注意にはドアの鍵を忘れずに掛けることで、患者が逃げることがあるとのことであった。

毎日の勤務兵は五、六人で、兵舎勤務もある。日が過ぎるにつれて古年兵達は勝手な行動を取って病室内に姿を見せなくなる。軍医のいる時はいるが、後は我々にしっかりやれとばかりである。

昭和十五年四月二十九日、紀元二千六百年祭があり、五月に第一回支那事変の論功行賞の発表には刑部中尉殿が勲六等を受賞される。陸軍病院の軍医の方々は大喜びであった。衛生士官をはじめとして曹長位まで、その中に私達臨時召集された補充兵百三十五人も従軍記章を受賞したので現役兵が大変むくれていた。

病院内の患者約四千五百人の中、数百人の方々が受賞されたと聞きました。勤務に馴れてきた秋

口より先輩の杉田と私が診療の助手を務める事になり、私も杉田同様に大変軍医に気に入られ、病気の事、病床の事など多く教育を受けた。そして患者に対しての注射や薬物のことも、言われたようにできるようになり、勤務が楽しくなってきた。

昭和十六年の春がきて、この年は前年と違う事になる。二月に狂暴な患者が入るとの知らせがあり、病室の準備について石坂室長、杉田、私の三人が軍医に呼ばれ、しっかり頼むと言われた。

下士官と兵に連れられて来た患者が大声を出して威張っていた、小柄な身体の患者だった。軍医より「いつものように」と言われ、杉田と私が引き受け、連行兵に患者を「放せ」と言って引き取り、患者の腕を持った瞬間、それまで大声で威張っていた患者が素直になる。個室に入れ病衣に着替えさせた。連行兵はただただ驚いた様子だった。

軍医が言った「いつものように」と言うことは最初が大事で、患者に嘗められない内に二、三発「ヒンタカン」を打つと三日位で軽い患者は直ってくる。半分は偽病が多いとのことであった。

次に入ってきた狂暴患者は身長一七五センチ、体重は八〇キロであった。この患者には杉田も私も大変な闘いを何回もやった。相手は柔道三段、剣道三段である。そのため大小便の後始末をするのに、二、三人仲間を呼んで、患者を縄で結くのであるが、そこまでが大仕事であった。四月末までに、このような手強い患者が四人入院した。

日宿が二十日間位あり、それが三カ月位続く。兵舎には、たまに顔を見せる程度となる。それで兵隊と班長達からは嫌味を言われる。「七内科」勤務は兵隊がいやがる訳である。重い患者が少なくなり、良くなったと思っていると、他の病舎よりちょっと変な患者であるが、医官同士の話し合いによって一人個室に預かることとなった。

三日目、私も杉田も兵舎の方にいた。急いで来てくれと友が呼びにきた。「患者が自決した。首つりだ」という。首を吊って一時間以上とのこと。日直士官だと事が大きくなるから明日まで待たせ、宿直士官に言わず病舎の婦長を呼んだ。軍医の来るのを待つと、軍医は日直士官に言わぬ事を喜んでくれた。相手の軍医との話し合いで診療主任の田原軍医大佐が、これは大事になると預かった。「七内科の兵隊が処罰されるから、わしにまかせろ」となった。その患者は論功行賞で功七級を受けてから変になったという事を婦長から聞いている。

一度あったことは二度ある。これも杉田と私が居ない日の出来事であった。その後、やはり預かり患者と同じような事があった。私が病室に行き人工呼吸をやっている時、患者病舎の主任の藤田少佐が婦長と共に来て、私達四人に「駄目だ、止めてよい。ご苦労だった」と一言言って、おおご

とに話を出すな、と注意して去って行く。

それからは「七内科」の軍医に、またこれから患者を預かった時は杉田、福原は必ずいてくれるようにと班長と私達に言い渡しがあった。

まだまだ書くことはあると思いますが「七内科」の勤務の内でもとても良い事も沢山ありました。

患者護送や兵役免除を家に、また全治者は隊または陸軍病院に送ったことなどです。そして患者と共に卓球などして衛生兵が負けると患者が喜び、庭で患者と遊んだり病院内の散策に出ることです。

「七内科」に安置室があり、毎日のように何体かの病死者があります。その場でお経を上げて下さる中根尼僧さんは第一陸軍病院公認のお方で、元岡田首相の姪子さんでした。何年間の永い間、無報酬で務めて下さっています。私は「七内科」にいる間、いろいろと教育を受けました。ありがたく思っています。

また、入隊兵が入る、退役者が出る、その度に歓送迎会があり、演芸などがあります。その都度、私は呼び出される人気者でした。

想い出の中には、重い患者だった江連君が面会に来た時はちょっと驚きました。医官室で入隊当分の時のお礼を述べられ、その後で私に対し「福原さんのピンタは今でもその痛さは忘れませんが、そのために今の元気な身体になった」と涙を出してのお礼には私も嬉しかったものです。江連君のように他にも立派な軍服姿でお礼に来た下士官の方もおりました。

患者護送の思い出としては、小倉陸軍病院、松江陸軍病院等へ行きましたが、静岡陸軍病院の患者は陸軍少佐で国府台陸軍病院へ護送しました。重病者で「精神科」の中尉は軍刀を握ったままの患者でした。

親元への護送としては、熊本、四国、新潟、山形、神奈川、千葉、川越などで、送って行った家に着替えの着物も無い家もありました。

私ぐらい出張や公用で外出をした兵隊は同年兵には無いと思います。

私は衛生兵として患者を大切に、そして親身になって精神病を治すことで闘っていました。軍医からも感謝されましたが、兵舎の班内では、班長から受けの良くない方だったと思います。

まだまだ馬鹿々々しいことの多かった三年間でした。

### 【解説】

体験記執筆者は大正七年、現在の東京都墨田区東駒形で生まれ、昭和十三年六月の徴兵検査で第一乙種合格で第一補充兵となる。

翌年の昭和十四年十二月、臨時召集で世田谷の野砲第一連隊に入隊となり、衛生兵要員として翌年の一月十二日付で臨時第一陸軍病院に配属され、その後、臨時第一陸軍病院の第七内科に勤務する。

昭和十七年十一月二十五日、召集解除で一旦、

除隊となり、体験者の第一回の軍隊勤務を終えているが、昭和十六年の大東亜戦争の勃発により第二回目の召集を受け、昭和十九年八月、東京第一陸軍病院に入隊となった。そこで同陸軍病院内で第一二九兵站病院「威三八八九部隊」が編成されて、フィリピンへ進出のため「日洋丸」で台湾の基隆に寄港、バシー海峡を通過し、二十八日にはマニラ上陸している。

以後の比島における戦争の体験、終戦後のバタングス米軍収容所における演劇「笑南劇場」を開催しての抑留生活の様子は、平成十四年版「平和の礎」に掲載され、体験者の第二回の軍隊生活として描かれている。

今回の体験記は、体験者の第一回の軍隊生活であった臨時第一陸軍病院の「第七内科」勤務の衛生兵の体験を記録したものである。

陸軍の衛生兵教育の目的として「衛生兵教育規

則」によると「衛生兵ノ教育ハ、平戦両時ニ於ケル衛生勤務ヲ習得セシメ、補助衛生兵ノ教育ハ戦時ニオケル衛生勤務、特ニ傷病者看護ノ方法ヲ習得セシムルヲ以テ目的トスル」とある。

衛生兵になるには病院と部隊によって異なり、病院勤務の衛生兵は、徴兵検査において既に衛生兵として選抜され、主として地方（民間）において衛生に関係していた者を選んでいたといわれる。

部隊付の衛生兵は、初年兵として入隊後一期の教育を受けてから、各中隊より指名され、または志願によって選抜された。病院付の衛生兵は、歩兵の一期の教育は入隊した歩兵部隊で習得した後、病院に復帰して、部隊衛生兵と共に、その衛戍地陸軍病院で六カ月の衛生兵教育を受けたのである。

しかし体験者の入隊後の昭和十六年頃からは、部隊編成が頻繁に行われ、衛生兵要員も不足し、歩兵教育は一カ月、衛生兵教育は三カ月で終了

し、部隊への配属や、戦地へ出征した者も多くなって来ている。

また大量の教育のため、北海道の衛生兵教育の場合のように、陸軍病院での教育では不足し、大講堂を新設して、教育即補充ということも多くなり、また関東軍の衛生兵集合教育を受けた例もある。

また昭和十三年頃までは、現役の衛生兵教育のほかに、主として衛生隊担架兵要員の補助衛生兵教育も行われるようになり、歩兵一カ月、衛生兵教育二カ月という短期間で実施されるようになった。そして教育内容も補助衛生兵教育教程による衛生法救急法、担架術が主体であったが、戦争の拡大と共に、一般の衛生兵教育期間が短縮されたこともあって、自然にこの教育は中止されている。

また療工兵の教育は、一般衛生兵の教育を受ける中で、必要な教育が別科として実施され、薬剤将校、療工下士官などを教官として行われてい

た。

太平洋戦争が、敗戦の色濃く、本土決戦体制を固めざるを得なかった昭和十九年には、陸軍病院の衛生兵は、特殊勤務者を除いて全員が第一戦部隊要員となっており、体験記執筆者も、この例に漏れず比島戦線に出動している。

このように陸軍衛生兵の不足を行うため、陸軍病院では、陸軍衛生兵に代わって陸軍看護婦を軍隊独自で教育するために陸軍看護婦生徒の教育も開始している。

体験記筆者の第二回の軍隊生活であった比島戦線が終わり、バタンガス米軍収容所における抑留者慰安の演劇活動「笑南劇場」を筆者が中心となっていて行っているが、この体験者の演劇を得意とした、その片鱗が、今回の東京第一陸軍病院における入隊兵、退役者が出る度に行われた歓送迎会に、呼び出される人気者であったこととして記されている。

## 第一震洋特別攻撃隊

小笠原諸島・

### 父島での任務

福島県 菊地 貞吉

私は大正十五（一九二六）年九月、現在の喜多方市に生まれ、昭和十六（一九四一）年四月、横須賀海軍工廠に見習工として就職しました。同十八年三月卒業、同時に旧制中学校を卒業しました。この間に横須賀軍港に入港する軍艦、戦艦、航空母艦、巡洋、駆逐、潜水艦、機雷艇、掃海艇などあらゆる艦船が入港しますので見学もしました。乗っても見ました。それで私も海軍に憧れ、昭和十七年九月に海軍に志願し、同十八年五月、横須賀第一海兵団に入団しました。

五日後に久里浜海軍工作学校に、第十六期生、普通科練習生として入校しました。ここで八カ月